ヨハネによる福音書 7 章 10〜24 節

今月は 7 章の第 2 回目、10 節から 24 節が聖書の箇所となります。時は仮庵祭(かりいおさい)の賑(にぎ)わいのとき、場所はエルサレムの神殿で、その境内で イエスが人々に「教え始められた」(14) という場面です。

ただ、これに先立つ前回の箇所 (7：1〜9) で、イエスは兄弟たちに「わたしはこの祭りには上(のぼ)って行(い)かない」(同 8) と言っておられた。なのに、どうして今、祭りの神殿にいて、そこで人々に教えておられるのか。どこか分かりにくく感じられもするのではないでしょうか。前回から今回へとどのように進み、そして今回、そこではたして 何がどう展開して、どんな語りかけがなされようとしているのか。御一緒に探ってゆけたらと思います。

言い回しについて

・今月の箇所は 初めに、言い回しについて幾つか説明するとともに、全体の流れを押さえておくほうが分かりやすいかと思われます。

・言い回しとは「ユダヤ人たち」(11、13、15) と「群衆」(12、20) という二つの表現で、それぞれ 次のような人たちを意味しています。

①ユダヤ人たち：いわゆる宗教的・政治的指導層のユダヤ人たち。

②群衆：エルサレム周辺の人々を含め、「祭り (仮庵祭(かりいおさい))」(10、11、14) に詣(もう)でるためにやってきた巡礼の人たち。

・ちなみに、

①19 節の「あなたたち」は指導層のユダヤ人たちを、

②21、22 節の「あなたたち」は指導層のユダヤ人たちと群衆の両方を指しています。

全体の流れ

・全体の流れは、以下のとおりです。

①イエスが神殿の境内で教えておられる (14)。

②すると まず、指導層のユダヤ人たちがその知識に驚きの声を上げる (15)。

③これに対し、その彼らに向かって イエスが語られる (16〜)。

④と 今度は、それに対し、群衆が口を挟(はさ)む (20)。

⑤そして 最後に、これを受け、指導層のユダヤ人たちと群衆の両方に向かって イエスが言葉を語られる (21〜)。

「わたしはこの祭りには上(のぼ)って行(い)かない。
<u>まだ、わたしの時が来ていない</u>からである」(7：8)

「しかし・・・イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた」(10)

「祭りも既に半ばになったころ、

イエスは神殿の境内に上って行って、教え始められた」(14)

・事は、イエスが「祭り（仮庵祭)」に上っていかれたときのことでした（10)。

・ただ、この冒頭から、紛らわしく思わされもするのではないでしょうか。それは、イエスが

①前回、「わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである」(7：8）と言っておられたのに、

②実際には 上っていかれたからです（10)。

いったい どういうことなのでしょう？

・次のような背景に即して考えてみてはいかがでしょうか。

①イエスは（前回の）兄弟たちの煽動に乗せられ、奇跡的な「業」を見せるためにエルサレムに向かわれたのか？（7：3 参照)

②イエスは「人目を避け、隠れるようにして上って行かれた」(10)。また、「祭りも既に半ばになったころ・・・神殿の境内に上って行って」(14）と書かれている。

これらはイエスのどんな思いを示唆しているか？

〔参考〕当時、仮庵祭をはじめとする エルサレム神殿での３大祭には、巡礼団が各地から群れをなし、大挙してやってきた。人々はその一団に加わり、祭りの始まる前にエルサレムに入るのが常だった。

③「まだ、わたしの時が来ていない」(7：8）と言われるイエスにとって、そうすることは？

④そして、イエスは「教え始められた」(14）とあることからすると？

・以上から考えるとき、どんなふうに推察されるでしょうか。そもそも、イエスは何を第一の目的としてエルサレムに赴かれたのか。それが問題のように思われます。

「祭りのとき ユダヤ人たちはイエスを捜し、

『あの男はどこにいるのか』と言っていた」(11)

「群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた」(12)

「しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった」(13)

・こうして、イエスはこのとき、神殿におられました。ところが、そのイエスを取り巻いていたのは、ユダヤの政治的・宗教的指導者たちの憎しみでした。

・その情況を聖書に見ると、

①祭りのとき、ユダヤ人たちは「イエスを捜し」、あの男はどこにいるのか、と言っていた（11)

②群衆の間では、イエスのことが「いろいろとささやかれていた」(12)

③しかし、「ユダヤ人たちを恐れて」、イエスについて「公然と語る者はいなかった」(13)

と書かれています。

・ユダヤの指導層の間で、イエスに対する敵意が膨らんでいた。そして、それは人々に広く知られて

いた、ということではないでしょうか。

・そして、その憎しみは今や、殺意にまで・・・。

「この人は、学問をしたわけでもないのに、
どうして〔旧約〕聖書をこんなによく知っているのだろう」(15)

・イエスが神殿で教え始められたのは、そうしたただ中ででした。

・すると、それを聞いていたユダヤ人たちから、声が上がります。この人は「学問をしたわけでもないのに」どうして・・・(15)。

・「学問をしたわけでもないのに」とは、今日的(こんにちてき)な言い方をすれば、学歴もないのに、ということです。当時の情況に即して 具体的に言うなら、誰の弟子でもないのに、ということになります。

・だとしたら、その裏にあったのは 彼らのどんな思いでしょうか。実際、そこには苛立(いらだ)ちさえあるように感じられますが・・・。

・そして、私たちはそこから、信仰の何を学ばされるでしょうか。

「わたしの教えは、自分の教えではなく、
わたしをお遣わしになった方(かた)の教えである」(16)
「自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、
その人には不義がない」(18)

・「学問をしたわけでもないのに」(15) という ユダヤの指導者たちのそうした呟(つぶや)きに対し、これに答えて イエスが言われたのが、それに続く上記の 16 節の言葉でした。

・そして、「お遣わしになった方(かた)の教え」を語り (16)、その方の栄光を求める者は「真実な人」であり、その人には「不義がない」と言われるのです (18)。

・なぜ、そのように言えるのか。

・そして、そこで言われる「真実な人」「不義がない (人)」とはいったい、どんな人を意味しているのか。信仰生活 100 点満点の優等生か、それとも・・・?

　逆に言うと、聖書の言う「真実でない人」「不義な人」とは・・・?

・誰の、何を、どうする人がそうであり、また そうでない、と イエスは言われるのでしょうか。

・私たちにも向けられている言葉として語られているように思われます。

・そもそも、イエスにこのように言わせたのはユダヤの指導者たちでした。イエスは彼らの内に何を見て取ったのでしょう?

①イエスに対する、彼らの偽らざる思いとは?

②そこに根を持つ、彼らの思わくとは?

③神に対する、彼らの聞き方とは?

④そこに見られる、彼らの本質的問題とは?

・ただし、そうした彼らも決して、いわゆる悪い奴(やつ)らではなかったということ。それは いま一つ、

注意せねばならない点ではないでしょうか。

・知識も良識もあって、聖書にも通じていた 教養ある立派な人たちです。だとすれば、イエスに対する非難や攻撃は 彼ら自身の信仰心から、つまり 彼らなりの善意から出ていたのかもしれません。

・そんな彼らが、しかし イエスを・・・というのですから、そこには さらにも深刻な問題が潜んでいるように思われます。それははたして、何なのか？

・そして、そんななか、当のイエスはどのように生きられたか。

・これらもまた、自身の在り方と重ねて考えられたら、と思います。

「あなたたちはだれもその律法〔モーセの律法〕を守らない」(19)

・終わりに、「モーセの律法」をめぐる 19 節以下のやり取りについて 簡潔に御説明をいたしましょう。

・イエスは２つの点から、あなたたちは律法を正しく守っていない、と指摘されます。

①一つは、律法の中心である「十戒（じっかい）」に厳然と「殺してはならない」（出エジプト 20：13）とあるのに、ユダヤの指導者たちはイエスを殺そうとしていた、という事実。

〔参照〕「モーセはあなたたちに律法を与えたではないのか。ところが、あなたたちはだれもその律法を守らない。なぜ、わたしを殺そうとするのか」(19)

②あと一つは、安息日（あんそくび）には労働が禁じられているといっても、現に「割礼（かつれい）」は施しているではないか、という 割礼の事実に基づくもの。

＊割礼：男児が生まれたとき、生後 8 日目にその性器の皮に施す儀式。ただし、割礼がしきたりとして始まったのは、モーセ以前の「族長たち（アブラハム、イサク、ヤコブ)」の時代から (22)。

＊他方、安息日の規定では、命に関わる場合以外、医療行為ですら 労働とされ、安息日にこれを行なうことは禁止。

＊したがって、割礼も労働とみなされ、安息日に行なうことは禁止。

＊しかし、生後の 8 日目が安息日に当たった場合は例外的に、それを施すことを許可（イエスが言われたのは このこと)。

＊なぜなら、割礼は神の民・イスラエルの一員とされるための儀式で、それがなされなければ、神の祝福からこぼれ落ち、救いから漏れてしまうと考えられていたから。

＊それゆえ、割礼は安息日の規定以上のものとされていた。

＊このように、ユダヤの指導者たち自身が 現に、人の救いを安息日の規定に勝（まさ）るものとしていた。

＊そのことを イエスは指摘され、先の出来事に言及して言われたのが 21 節の言葉、「わたしが一つの業（わざ）を行（おこな）ったというので、あなたたちは皆 驚いている」。「ベトザタの池の病人の癒やし」(5：1～18）のことで、一人の人の救いの出来事。それは、安息日になされたもの。そのことを、労働を禁じた安息日の規定に抵触するとして、そのとき ユダヤの指導者らは問題視していた (同 16)。

＊しかし、イエスは今また そのことに言及され、問い返される。「モーセの律法を破らないようにと、人は安息日であっても 割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身をいやしたからといって 腹（はら）

を立てるのか」(23) と。すなわち、人を救うこと。それこそ、あなた方が現に 割礼という儀式で行なっていることであり、何より大事なことではないのか。なのに、あなた方は自分らの都合に合わせて 安息日の規定を持ち出し、救いの業(わざ)に努めるこの私を亡き者にしようとしている、と。

・このようにして、最後に言われたのが次の言葉でした。「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい」(24)

・これが「モーセの律法」をめぐる 19 節以下のやり取りですが、「モーセの律法を守れ」と言いながらも、実際には守らない、また守ることにケチをつける、という この歪(ゆが)んだ現実。そうした現実から 信仰の事柄として学ぶべきものがあるとしたら、それははたして どんなことでしょうか。御一緒に考えてみたいと思います。